Pick up! PLAY HOUSE

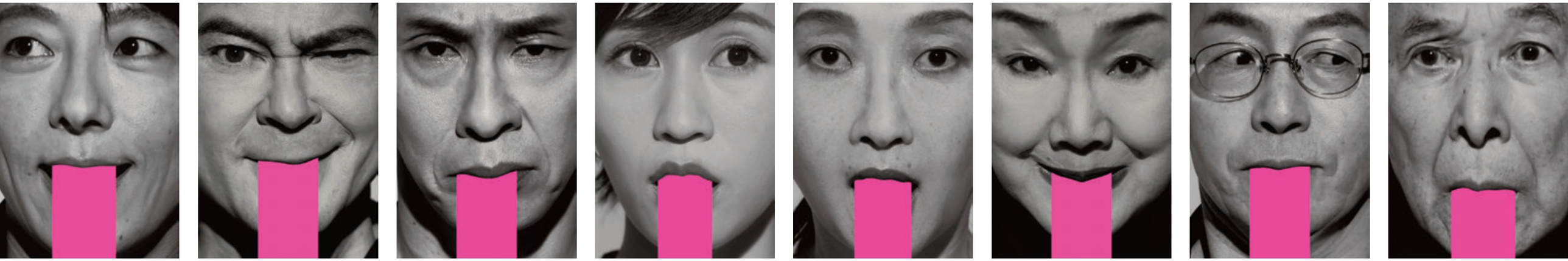
NODA・MAP 第24回公演「フェイクスピア」

作・演出：野田秀樹

Fakespeare

フェイクスピア

FAKESPEARE



言葉遊びと多彩な俳優陣に導かれ、本当の本当を探る旅へ。

高橋一生をはじめとする出演者も大きな話題を呼んでいる本作、
タイトルのインパクトはこれまで以上。トリッキーなタイトルに隠されたものとは？

野田秀樹の戯曲と言えば、まず挙げられる特徴は“言葉遊び”だろう。彗星のごとく登場した70年代から現在まで、そこに注ぐ熱量は一向に衰えない。むしろ物語の根幹への関わり方では、ますます重要度が増している。“遊び”という言葉が持つ軽やかさ、とっつきやすさを入口に、表層のおもしろさの下へ、また下へと観客を誘っていき、最深部で、駄洒落のような言葉に込められた衝撃的な意味を明らかにする。それはまるで、何段階かの時差で作動し、徐々に大きな爆発を起こしていく時限爆弾のようだ。

だから今回、タイトルからして大胆な“言葉遊び”であることにニヤリとしながらも、新たな緊張感も湧いてくる。偽物、贋作を意味するフェイクと、世界で最も有名な劇作家シェイクスピアの名前を掛け合わせたトリッキーな造語は、作品に仕掛けられた企みが、これまで以上に覚悟を伴うものではないかと思えるからだ。何しろフェイクはここ数年の、シェイクスピアは長年の、野田の創作の足場、モチベーションなのだから。

まず“シェイクスピア”は、前作『「Q」：A Night At The Kabuki』が「ロミオとジュリエット」と源平合戦を重ねたものだったが、野田が夢の遊眠社時代から「十二夜」「から騒ぎ」「リチャード三世」「夏の夜の夢」など何作も翻案してきた愛着ある劇作家。設定を大胆に変えたり他の物語を足すなどしても屋台骨が揺るがないシェイクスピア作品は、懐の深い実験のゆりかご。と同時に、現在や未来を考える時に「昔の人はどうだったのか」と立ち戻れるゼロ地点でもある。そして“フェイク”だが、もともと野田は流言や噂話が引き起こす事件に関心を持つ劇作家ではあったが、この10年は、インターネットの普及がもたらしたフェイクニュース、事実の軽視や言葉の形骸化に対する危機感が加わった。同じ言葉の暴力を扱っていても、’96年初演の「赤鬼」で描かれたのは、人間のコミュニティが内包するよそ者への嫌悪感や恐怖心が生む差別で、攻撃する者とされる者はお互いの顔が見えていた。それが、’10年の「ザ・キャラクター」では、マスコミのスキャンダラスな報道とそれに食いつく人々にかき消される真実と当事者間の距離が写し取られた。’12年の「エッグ」や’16年の「逆鱗」’19年の『「Q」：A Night At The Kabuki』では、個人の喜びが不特定多数の熱狂に絡め取られ、多くの犠牲者を出す悲劇へと変容する様子が描かれるように。その悲劇は主に太平洋戦争中の史実を指していたが、人魚や架空のスポーツなどのフィクションと混ざり合い、ネット社会の匿名性や恣意的な抜粋、拡散のスピードなどの問題と重なる、まさに現代の物語となっていった。

こうした流れの最先端に位置する「フェイクスピア」は、歪められたり隠されたりして、見えづらくなってしまったどんな真実へと私達を導いてくれるのか。大いに興味が湧くと同時に、間違いなく野田が、これまでで１番高い山を目指しているとも思う。この大冒険に声をかけたのが、高橋一生、川平慈英、大倉孝二、前田敦子、村岡希美、白石加代子、橋爪功という、まさにドリームチーム。

高橋は10年以上前にNODA・MAPのワークショップに参加、その身体能力の高さに野田が驚き、何度かオファーしたもののスケジュールが合わず、今回双方にとって念願の出演に。川平はミュージカルの印象が強いが、近年はストレートプレイでも存在感を発揮、今年２～３月の「藪原検校」では、井上ひさし戯曲の膨大なせりふを引き受ける盲太夫役で高いポテンシャルを見せつけた。もうひとりの野田作品初参加である前田は、舞台出演は４作目と多くないが、蜷川幸雄、岩松了など俳優への要求がひときわ高い演出家と組み、それに応えてきた。この作品でも、映像とは異なる魅力を存分に発揮してくれるだろう。そして大倉、村岡、白石、橋爪は、言わずもがなの実力派であり、ここ１番で野田が頼るパートナー。険しい山道を拓く道具を、豊かな引き出しから次々と取り出してくれるはず。さらに、もはやNODA・MAPの前進に欠かせないエンジンとなったアンサンブルの活躍も楽しみだ。

ところで「フェイクスピア」には恐山のイタコが登場するらしい。イタコは死者の言葉を残された家族や友人に伝える。シェイクスピア劇では、魔女や幽霊や預言者によって、運命や神の意志が告げられる。直接はつながれない相手の言葉を第三者が語る時、受け手は何を根拠にそれを信じるのか。そう言えば俳優もまた、劇作家の書いた言葉をあたかも自分のもののように発して観客に渡す。さらに言えば劇作家は、言葉を使って言葉にならない感動を生み出す矛盾した存在でもある。野田の仕掛ける今度の旅は、言葉を通して真実や事実を深く考えるものになりそうだ。俳優達の冒険に、私達も勇気をもって帯同したい。

文：徳永京子（演劇ジャーナリスト）

2021年5月24日㈪～7月11日㈰
プレイハウス　詳細はHPへ

作・演出：野田秀樹
出演：高橋一生
川平慈英　大倉孝二　前田敦子　村岡希美
白石加代子　野田秀樹　橋爪功

石川詩織　岩崎MARK雄大 浦彩恵子
上村聡　川原田樹　白倉裕二　末冨真由
谷村実紀　手打隆盛　花島令
間瀬奈都美　松本誠　的場祐太
水口早香　茂手木桜子　吉田朋弘

東京公演4月チケット発売
大阪公演あり
https://www.nodamap.com/fakespeare/

＊新型コロナウイルス感染症にかかわる諸般の事情により、掲載情報に大幅な変更がでる場合がございます。最新情報は東京芸術劇場ホームページ等でご確認ください。